シイカとラルキニアの森

LeoVart

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シイカとラルキニアの森

【Ｎコード】
Ｎ５５８５Ｗ

【作者名】
ＬｅｏＶａｒｔ

【あらすじ】
※これはＬｕｉの時に投稿していた小説を加筆訂正をして投稿し直したものです。
「ラルキニアの森」。それは、人喰いの怪物が棲むと言う魔の森。森の怪物の生け贄として選ばれてしまったシイカはあまりに不運過ぎる自分の運命に絶望しながら、森の中で見つけた何もない場所で眠りに落ちる。次の日、目を覚ましたシイカの目の前に……

ちょっと不思議な少女と異形の怪物と、脱走常習犯王子のおはなし。

1．魔の森

「いったぁ……」

地面に打ち付けた腰を擦りながら、シイカは顔を上げて辺りを見渡した。

後ろで遠ざかっていく足音が聞こえた。シイカをここに連れて来た人たちの足音だった。

シイカは服に付いた土を払い落としながら立ち上がった。ここは「ラルキニアの森」と呼ばれる、うっそうと茂った森だ。背の高い木々が沢山の葉で日光を遮っているため、地面にはほとんど日が当たらない。いつも霧がかかっていて湿っぽい。鳥の声も、動物の気配さえ少ない不気味な森だった。

シイカがこの森に連れて来られた理由。それは、森に棲むと言う巨大な怪物のための餌。つまり生け贄だ。

森の怪物とは、もう随分前からラルキニアの森に棲み着いている異形の化け物のことで、人の頭と獣の身体をしているらしい。それが何年か前に何故か森から出てきて人を襲うようになった。

なので、森から近いシイカの住む村で定期的に村人1人を生け贄としてラルキニアの森に置いてくるようにした。

その結果、怪物が村にくることはなくなったが、代わりに毎回どこかの家が哀しみに包まれることになったのだった。

「まさか私が選ばれるなんて……」

シイカはあの時を思い出して絶望した。生け贄を選び出すくじ引きをした時だ。自分は絶対に当たらないと思って自信をもって引いたくじは――先っぽだけが真っ黒い絶望の色に染まっていた。

周りの人たちが息を飲むのがわかった。そして、同時に安堵の溜め息を吐くのも、またわかった。

自分は選ばれたのだ……最悪の役目に。

村の皆は、シイカに冷たかった。シイカの家族は、とっくにいな

くなっていた。シイカのために泣いてくれたのはいつも世話をしてくれていた優しい老婆と、唯一の友達のリンだけだった……。
シイカは取り敢えず歩くことにした。両手と両足に重り付きの鎖が付いていて、血の臭いで怪物を誘うために付けられた傷に触る。痛かったけど、どこかに移動した方が良いと感じた。
引きずる足にまとわりつく鎖が音を立てる。その金属の音が耳障りで仕方なかった。シイカはどんよりとした気持ちのままのろのろと当てもなく森をさまよった。今自分がどこを歩いているかなんて、考える気も失せていた。
そうしてどのくらい歩いたのだろうか。突然視界が開けた。シイカはびっくりして顔を上げる。
今まで日の光が入らないほど茂っていた森がそこだけぽっかりと開いていた。今日は曇りの日だったが、晴れていたならきっと素敵な空が見えるのだろう。
何故かここの一角だけ木が1本も生えていなかった。　でも、そんなことすらどうでも良く感じた。もうすぐ自分は死ぬのだ。今さら何がどうなろうと自分には関係のないことだった。
シイカは適当にその場に座り込んだ。そのうち座っているのも疲れて、下草の生い茂る地面に寝転んだ。
だんだん眠くなってきて、シイカはそっと目を閉じた。つぎにいつ目覚めるかはわからなかったし、そもそも目覚めることがあるかもわからなかった。
……さよなら、自分。さよなら、世界。
眠りに落ちたシイカの上に黒い影が差したのに、彼女は気付くはずもなかった。

2．朝靄の出会い（前書き）

楽に小説移せる方法ってないのかな…
ランキングタグの付け方分からない（笑）

2．朝靄の出会い

何かが近くにいる気がして、シイカは夢から覚めた。多分でかい何かがいる。すんすんと鼻を鳴らすような音が聞こえる。

重いまぶたをゆっくり持ち上げたシイカのすぐ目の前に……

……大きな顔があった。「うわわわわわわっ！！！」　シイカはびっくりし過ぎて、思わず大声を上げた。向こうもそれに驚いて、後ろに飛び退く。今日は晴れていたので、朝日が謎の人物を照らす。

その人物の姿を見て、シイカは自分の目を疑った。

「えっ……嘘……」思わず声が掠れる。

地面に四つん這いになってこちらを見る人物は……村の話に伝わる怪物そのままだった。

人間の軽く5倍くらいはあろうかという身体の大きさ。全身が純白の長い毛で覆われ、さらに同じような感じでふさふさの物凄く大きな尻尾が生えている。真っ白な体毛と同じく、白く腰あたりまで伸びた髪。その髪に見え隠れする顔は少年のもので、結構な美形。シイカをじっと見つめる目はアメジストの色。その瞳の中心で、黒い瞳孔が縦に細く裂けていた。

「ひっ……」

怪物はゆっくりとシイカに近づいてきた。シイカは身を固くする。足ががくがくと震えた。恐くてどうしようもなかった。怪物が唸り声を上げると、びくっと体をすくませた。シイカはじりじり後退りするが、後ろの岩にぶち当たった。

シイカに逃げ道はなかった。

美形の怪物は鼻を近づけて、シイカの傷の匂いを嗅いだ。巨大な顔がすぐ近くに迫る。シイカは小さく悲鳴を上げて縮み上がった。

怪物は傷を先の尖った舌でぺろっと舐め、怯えるシイカをじー――っと見つめてきた。シイカはつかの間怖いのも忘れて、相手の目を見つめ返す。鮮やかなアメジストの瞳が静かに向けられていた。

やがて、化け物はシイカから目を離した。人間を丸飲みに出来そうな口をくわっと開く。ズラリと並んだ鋭い牙が見えた。

――これで私は終わるのかな。

シイカはそう思った。ぎゅっと目を閉じて、その瞬間を待つ。

でも、その時はいつまで待ってもやって来なかった。

「……あれ……？」

ジャキンという音が聞こえて、シイカは目を開けた。

怪物が咬み切ったのは、シイカの頭ではなく、彼女の手を縛る鎖だった。

「え……」

化け物はかがみこむと、今度は足に付けられた鎖をくわえる。鎖が切れる音がして、両足が自由になった。

彼（？）は呆然とするシイカに寄って来ると、低く小さな唸り声を上げて、そっと、そっと頭で触れた。初めは何が起こったのか分からず放心していたシイカは、彼がもう1度唸って頭をこすり付けたので我に返った。

シイカは自分に触れている物凄く大きな頭に触れてみたくなった。思い切って、おずおずと触れてみる。一瞬彼の全身がぴくっと動くが、さっきよりもっとすりよってきた。

不思議な気分だったが、もう恐くはなかった。シイカは甘えるようにすりよる彼を、ずっとずっと優しく撫でていた。

朝靄のなかでの、奇妙な出会いだった。

プチッと果物をもぎ、怪物はそれを丸飲みした。シイカもカリカリと果物をかじる。

次々に果物を食べる彼を眺める。日差しを浴びて、彼の雪のように真っ白い毛が輝く。長く美しい毛並みは、光によって虹のように色を変える。まるでオパールみたいだ。

シイカの口が、不意にこんな言葉を紡いでいた。

「ユキノフ」
ん？といった感じで怪物が振り返った。アメジストの目が問いかけている風に見えた。
「ユキノフ」と、シイカは繰り返した。
「それが、今日から君の名前ね。決定。オッケー？」
何言ってるんだろう、と思った。こんなのが人の言葉を理解するわけないのに「オッケー？」なんて。そもそもどっからこんな名前を思い付いたんだろう。う～ん……。
真っ白な獣は暫く考え込むように唸っていた。そして、満足気な表情になった。その顔は、どこか嬉しそうにも見えた。もしかすると、シイカの言っていることがわかっているのかも知れない。
「君……人の言葉分かるの？」
言葉？とでも言いたげにユキノフは首を傾げた。言葉って、何？そんな様子だ。
でもそれはシイカの気のせいかも知れないので、シイカは適当に笑って手をひらひら振った。
「何でもないよ。動物が人の言葉なんて分かるはずないもんね」まぁ、君が動物と呼べるかどうかは別として。
「ユキノフ」
名前を呼んだら、また、何？という感じで振り向く。それが可愛く見えて、シイカは笑った。ユキノフ、ユキノフと口の中で何度も繰り返す。
いい名前だな、と思った。

3．脱走常習犯と外交官

「はい、今日もは～じま～るよ～～」
渡された紙を見て、王子はうんざりした顔になった。
「ええ～っ、またかよ―」
「そんなこと言わないの。次に同じこと言ったら国王に報告しようかな～」
「……わかったよ。やるから」
王子はペンを取り、紙にさらさらと書き始めた。
「全くさぁ、誰のお陰で日頃の脱走がバレてないと思ってるんだ」
「はいはい、いつもありがとうねー外交官さん」
レシミル王国の外交官を務めるミクターチは大きく溜め息を吐いた。歳はもうすぐ４０。とある理由により、目の前でだるそうに課題を解いているティファニー王子を国王から『かくまって』いる。何年も前からこうだから、いちいち敬語を使ったりしないし、向こうも気にしていない。さすがに国王の前では話は別だが。
「なぁミクト。なんで父さんはいちいち礼儀とか武術とか勉強とかに五月蝿いんだろうな。母さんも細かいことで色々言ってくるし。ウザいったらありゃしねぇよ」
紙に文字を書き込んでいきながら尋ねるティファニーに、ミクターチは優しく微笑んでみせた。
「それは我が子を思う親の気持ちってやつだよ。ティファニーもそのうち分かる」
「理解したくねぇなぁ……終わったぞ」
金髪の王子は紙をひらひらした。城では絶対に勉強しない彼のためにミクトが作っているものだ。
ティファニーから紙を受け取り、採点をする途中、ミクトが突然こんなことを言ってきた。
「ティファニー」

「あ？何？」
「ラルキニアの森に棲んでる怪物の話って知ってる？」
「はあ！？」
王子は彼に軽蔑の眼差しを向けた。
「知ってるも何もねぇだろ、そんな有名過ぎるおとぎ話……」
「実は本当にあるんだよ」
「は？……嘘だろ？」
疑いの目を向けるティファニーに、ミクトは指を振った。
「冗談じゃないよ。ちょっと前に森の村で話を聞いたんだ。数年前に森の怪物が村におりてきて人を喰うようになったから、村が定期的に森に生け贄を出すことにしてるらしい」
ティファニーは驚愕した。んな話、一度も聞いたことねぇぞ！
「嘘だろ！？なんで今まで知られてなかったんだよ！」
「向こうが隠してたんだ」
何故？と問うティファニーに、ミクトは「分からない」と首を振った。
「んでさ、君、この国の問題としてこれをほっとける？」
「ほっとける訳ねぇだろ！今すぐにでも森に行って、その怪物をぶち殺してやりたいぜ！ったく、なんで国に伝えなかったんだ？そんなことならすぐに片付けられるってのによ」
靴で床を蹴り、怒ったように言うティファニーに「そうだろ」とミクトは頷いた。
「じゃあさ、行って来たら？森に」
「え？」ティファニーは驚いて彼を見た。
「いいのかよ？その間父さん達は？多分行かせてくれねぇぞ」
ミクトはちょっと考え込む仕草をしてからにこっと笑った。
「平気。俺が何とか言っとくよ」
「でもそしたらお前がヤバいんじゃねぇの？」
「大丈夫。任せろ」
「おおっ！流石ミクト！頼りにしてるぜ！」

ティファニーは親指をぐっと立てた。
「んで、いつ出発すればいい？」
「今」即答だった。
「は？今？何で？」
ミクトは部屋のドアを指して言った。
「早くしないと王様達が捜しに来ちゃうからね。行くんなら今のうちだぞ」
ティファニーは少しうつむき、やがて顔を上げた。その目には、強い意志が宿っていた。
「ミクト、俺行ってくる。そんで、化け物を倒して帰ってくるよ」
ミクトは安心したような笑顔になって、少年の肩に手を置いた。
「頑張れよ。皆の為だからな」
ティファニーも、力強い笑顔を見せた。
これが全ての始まりだった。

4．りびーと

その日の夜。
シイカはユキノフの隣で、きらきら輝く星空を見上げていた。
（どうしてこんなことになったんだろう）
そう思って、何となく溜め息が出た。本当ならば今ごろ自分はこの巨大な怪物に喰われて、この世の人ではないはず。それなのに、今こうしてその怪物の横にいる。まだ夢を見ているような気分だった。
そんな彼女を全く気にする様子もなく、ユキノフはせっせと毛繕いをしていた。同じところを何度も舌で舐めて、綺麗にしている。さっき毛繕い中の彼に触ったら、牙を剥き出して唸られたのでそっとしておいている。この調子でいくと、すごく時間がかかるかも知れない。
小さく喉を鳴らしながら丁寧に毛をほぐしているユキノフに、シイカは話しかけてみた。
「ねぇユキノフ」
「……ぐるぐる」
「聞いてる？」
「……」全然聞いてない。
シイカは諦めて、手近な木の下で横になった。寒い。冷たい風が当たって風邪をひきそうだ。
「……はっくしゅん」
シイカのくしゃみに、ユキノフがこちらを向いた。途中だった毛繕いをやめ、縮こまって震えるシイカのもとに歩いてくると彼女を抱くようにして丸くなった。暖かい毛の中に半分埋もれたようになる。彼の毛はふかふかして、家のベッドより気持ち良かった。シイカは真っ白くて長い毛を撫でた。
「ありがと」

そう言ったら、ユキノフが大きな紫の瞳でこっちを見てきた。本当に言葉を理解しているんじゃないかと思う。もしそうだったら、せめて返事的なものはしてほしい。
ユキノフは空を見上げ、大あくびをした。つられてシイカも欠伸をしたら眠気がやってきた。心地よい温もりの中で目を閉じる。
「……お休み」
『おやすみ』
誰かの声が聞こえたような気がしたけれど、それを意識する前にシイカは夢の中へ誘われていった。

『おきて、おきて』
「う〜〜ん……」
『おきて、あさだよ』
「う〜……誰？」
目を開けたシイカの上に、ドサドサと果物が落っこちてきた。
「うわわわわっ！！」
『おきた？』
シイカは慌てて立ち上がった。眠気は完全に吹っ飛んでいる。
「起きたに決まってんでしょ！……てあれ？」シイカはおかしなことに気付いた。
「ユキノフ……君……喋れるの？」
『そう　ゆきのふ、しゃべれる』
ユキノフは毛繕いをやめ、シイカに笑いかけるようにちょっとだけ口を開けてみせた。女子が見たら鼻血を出して倒れるに違いないと思わせる笑みだった。
『おまえ　あさ　おそいよ』
ユキノフの声はその顔にふさわしく、低めな少年の声だった。何だか無駄にカッコいいのは気のせいだろうか。そのくせ、喋り方は幼い。いろいろとギャップを感じさせた。「ねぇ、君話せるのに何

で昨日話しかけてこなかったの？」ユキノフは、少し心外そうに言った。
『きのう、なんかいもはなしかけた　なのに、へんじしてくれない』
「え？話しかけてたの？全然わからなかったけど」シイカは首を傾げた。
「あ、でも私が寝る前におやすみって言ってくれた？」『うん』
「何で昨日は何も聞こえなかったのかな？」
『わからない　でも、いまはしゃべれる　だからいい』
ユキノフは後ろ脚（？）で首の後ろを掻いた。どこまでも動物だ。……というか動物だけど。
「結構いい加減ね」
『いいかげん？なにそれ』　ユキノフは首をちょこっと横に傾けた。
「いい加減っていうのはね、君みたいに細かいことを適当に済ませちゃうことだよ」　シイカは説明してあげた。
『ふぅん　いいかげん、か　いいかげん　いいかげん』
ユキノフは何度も繰り返した。まるで、新しい言葉を覚えようとする子供と、ほとんど変わらないように見えた。可愛かったけど、変な癖がつくと困るのでシイカは彼に言った。
「あんまり繰り返すとリピート癖がついちゃうよ。やめときなって」
（りぴーと？なにそれ　たべるの？）
言うんじゃなかった。シイカは自分の額をこつんと叩いた。
これから、いろんなことをこのデカブツさんに教えなければならないと思った。
ヤバい……疲れる……。
その前に、自分の電池が切れる気がした。

5．目撃　ティファニー

ラルキニアの森の鬱蒼と茂った緑の中を歩きながら、ティファニーは溜め息と独り言を漏らしていた。

「ミクトの奴、ホントは嘘だったとか言うんじゃねぇだろうな……何にもいねぇし。ホントに化け物なんていんのかね……」

森はいたって静かで、たまに聞こえてくる鳥の声以外何も聞こえない。所々に木漏れ日が射し込んでいてとても心地いい。自分がイメージしていた森とは全く違い、余りにも平和だ。とても人喰いの怪物がいるとは想像できなかった。

ずっと歩きっぱなしで疲れてきた。面倒臭くなってきて、帰ろうかな～なんて考え始めた時。

近くで少女の話す声が聞こえてきた。

「は……？」

ティファニーは耳を疑った。空耳かと思ったが確かに少女が誰かに話しかけている。それにこたえるように獣の唸り声らしきものが聞こえる。

こんなところで何やってんだ？　そう思い、声のする方に向かう。少しすると突然目の前が開け……

ティファニーは信じられないモノを見てしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5585w/

シイカとラルキニアの森

2011年9月30日03時29分発行